

講義コード	14D5020000
講義名称	地域経済論Ⅱ　＜秋＞
科目英文名	Regional Economics Ⅱ
開講責任部署	経済学部　経済学科
代表ナンバリングコード	ECON2575
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 3 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
角谷　嘉則

授業形態	講義	アクティブラーニング	プレゼンテーション
	グループワーク	パソコン実習	

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。		
	小レポート/小テスト	宿題(演習問題、e-learning等)	ディスカッション(話し合い)

講義・演習概要	本講義は、日本国内の地域経済(狭義)だけでなく、国際社会の中の地域という視点から地域経済(広義)を把握し、地域の主体が試行錯誤しながらも活性化しようとする活動について学習していく。 特に、地域活性化と多様な主体の活動についてケースを通じて学びを深めていく。
学習（到達）目標	・国際社会の中で地域と地域経済の変化を把握できる ・地域の主要な産業と企業の活動について理解する ・地域活性化の手法や今後の方向性を理解する

講義・演習計画

回	内 容
第1回	イントロダクション ★本講義は、事前学習としてオンデマンド資料で自習し、事後学習としてM-Port上で課題をおこなってもらいます。 ★本講義の対面授業の内容は、基本的にグループワークで課題の背景や解決策の検討をおこないます。 ★また、対面授業の後半にプレゼンテーションしてもらいますので、必ずパソコンを持参して下さい。
第2回	地域開発①（高度経済成長期の開発）
第3回	地域開発②（公害などの外部不経済）
第4回	地域開発③（地域経済と外部効果）
第5回	地域開発④（リゾート開発）
第6回	地域開発⑤（サービス経済化の進展と知識産業の発展）
第7回	まちづくり志向①（都市景観）
第8回	まちづくり志向②（リノベーション）
第9回	まちづくり志向③（住宅政策とコミュニティ）
第10回	地域活性化策①（中心市街地活性化）
第11回	地域活性化策②（観光集客化）
第12回	地域活性化策③（行事の継承とイベントの創造）
第13回	地域活性化策④（地域ブランド）
第14回	地域活性化策⑤（都市再生）
第15回	まとめ

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	0%
レポート	0%
その他	100%

成績評価の方法（コメント）	講義内容についてM-Port上で実施する小テスト（10回程度）で評価する。 また、対面授業ではグループワークやプレゼンテーションの内容で加点する。
---------------	--

参考文献	岡田知弘・川瀬光義・鈴木誠・富樫幸一『国際化時代の地域経済学【第4版】』有斐閣アルマ 山田浩之・徳岡一幸『地域経済学入門 第3版』有斐閣コンパクト 角谷嘉則『まちづくりのコーディネーションー日本の商業と中心市街地活性化法制ー』晃洋書房
事前および事後学習の指示	テキストを購入する必要はないが、参考文献を事前に読んでおくことが望ましい。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
備考(管理者用)	（旧：地域経済論）02～10生読替

講義コード	15D0920000
講義名称	社会運動論[2]　＜秋＞
科目英文名	Social Movements
開講責任部署	社会学部　社会学科
代表ナンバリングコード	0SOC3490
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 3 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
本郷　正武

授業形態	講義
------	----

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 コメントシート
---------------	---

講義・演習概要	社会運動は社会（問題）を映す鏡に例えられる。社会運動が提起する問題や、運動の担い手、抗議手法などの観点から、社会問題のありかを探っていく。
学習（到達）目標	社会運動論の分析概念や基本的な考え方を身に付けることで、一見すると暴力的な現象と捉えられがちな社会運動を違った角度からみることができるようになることを目標とする。

講義・演習計画

回	内 容
第1回	イントロダクション：社会運動論の考え方
第2回	HIV/AIDSの問題系（１）：HIV/AIDSの社会意識
第3回	HIV/AIDSの問題系（２）：「医療化」にみる問題化のプロセス
第4回	HIV/AIDSの集合行為（１）：エイズ・ボランティアの登場
第5回	HIV/AIDSの集合行為（２）：市民活動・NPOの活動
第6回	HIV/AIDSの集合行為（３）：「薬害HIV」訴訟運動
第7回	HIV/AIDSの集合行為（４）：訴訟運動が残したもの
第8回	良心的支持者概念の検討（１）：運動参加者と集合財
第9回	良心的支持者概念の検討（２）：カミングアウトのポリティクス
第10回	持つ者と持たざる者との対立：階級闘争モデル
第11回	社会運動とアイデンティティ：「新しい社会運動」論
第12回	社会運動の合理性／非合理性：資源動員論の登場
第13回	資源動員論の展開と収斂：政治的機会構造／動員構造／フレーミング
第14回	現代の社会運動（１）：社会運動と暴力
第15回	現代の社会運動（２）：ライフスタイル運動

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	70%
レポート	30%

その他	0%
-----	----

成績評価の方法（コメント）	コメントペーパーの内容が優れている場合は加点する。
---------------	---------------------------

参考文献	本郷正武・佐藤哲彦編，2023，『薬害とはなにか：新しい薬害の社会学』ミネルヴァ書房， 長谷川公一編，2020，『社会運動の現在－市民社会の声』有斐閣， 濱西栄司ほか，2020，『問いからはじめる社会運動論』有斐閣， 上記の他にも講義中に随時紹介する。
事前および事後学習の指示	講義で紹介した概念や理論を駆使して、身の回りで起きた出来事や社会現象の謎解きをしてみることに。うまくいかない場合は、質問やコメントペーパーのかたちで言葉にしてみることに。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
キーワード	社会運動論、薬害、HIV/AIDS
備考(管理者用)	(旧：社会運動論) 10～18SS・17～18SW生読替☆(旧：社会学特講－社会運動論) 02～09SS生読替

講義コード	1610550000
講義名称	経営学のためのデータ分析　＜秋＞
科目英文名	Practical Data Driven Management Science
開講責任部署	経営学部　経営学科
代表ナンバリングコード	INFS2300
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 3 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
岳　理恵

	講義	アクティブラーニング	パソコン実習
授業形態	実務経験のある教員による授業① IEを取り入れたビジネスデータ分析を目的とする産学連携プロジェクト経験を有する教員がこの科目を担当する。		

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。		
	ディスカッション(話し合い)	協同・協調学習(グループ・ワーク、チームワーク、ペアワーク)	課題解決

講義・演習概要	本講義は、ケーススタディを通して、ビジネス現場の意思決定支援に必要なデータ分析のプレゼンテーション力を身に付けることを目的とする。 講義では、ビジネス運営の経済性や効率性の分析に着目し、種々の応用事例を紹介しながら解説する。また、データ分析のアプリケーションを複数利用することで、ビジネスデータ分析の楽しさを体験し理解する。
学習（到達）目標	ビジネスデータを題材として、データ分析のプロシージャを理解し、データ分析手法を体系的に理解する。

講義・演習計画

回	内 容
第1回	イントロダクション
第2回	データと情報
第3回	データ分析のプロシージャ
第4回	分析ツールのイントロダクション
第5回	分析ツールの環境設定
第6回	データ可視化
第7回	コスト計算
第8回	コスト予測（1回目小テスト）
第9回	インフレと価格変更
第10回	投資選択
第11回	生産スケジューリング
第12回	人員スケジューリング
第13回	リスク分析
第14回	利益予測（2回目小テスト）
第15回	授業統括(最終レポート)

成績評価の方法（コ	課題提出（40％）、小テスト・レポート（60％）を総合して学習到達度の観点から評価する。ただし、最終レポートを提出されなければ、失格とな
-----------	--

メント)	り、成績判断対象外となりますので、ご注意ください。
------	---------------------------

参考文献	講義レジュメをM-Portにて配布する。
事前および事後学習の指示	授業予定内容を確認するには、M-Port ⇒ 「WebClass」 ⇒ 「経営学特講-経営学のためのデータ分析」 ⇒ 「__回目」の順にアクセスしましょう。「_回目」のすぐ下になる「アジェンダ」と書いているメモ書きは、予定授業内容の目次となりますので、漏れなく学習するために、毎回の学習をスタートする前に、必ずご確認ください。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
備考(管理者用)	(旧：経営学特講-経営学のためのデータ分析) 14～24B生読替

講義コード	17E0630000
講義名称	英語の意味B　＜秋＞
科目英文名	Semantics of English B
開講責任部署	国際教養学部　英語・国際文化学科
代表ナンバリングコード	LING3420
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 3 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
森下　裕三

授業形態	講義
------	----

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 小レポート/小テスト 宿題(演習問題、e-learning等)
---------------	--

講義・演習概要	この授業では、英語の意味を、実際の使用場面や文脈、社会的・文化的な背景と結びつけて考えていきます。英語の語には、話し手の評価や態度が含まれていたり、聞き手との共有知識を前提として使われていたりすることがあります。この授業では、評価性、主観性、文脈依存、含意、フレームといった視点から、英語の意味がどのように理解されているのかを具体例を通して学びます。授業時間内での課題などを通して、自分で考え、整理することを重視します。英語の語の意味について、知っているか知らないかではなく、どのように説明できるかを考えることで、英語の表現をみる目を養うことを目指します。
学習（到達）目標	この授業を通して、受講者は次のことができるようになることを目標とします。 1. 英語の語の意味が、文脈・話し手の立場・聞き手との関係によってどのように変わるかを説明できるようになる 2. 英語表現に含まれる評価（よい／悪い・好ましい／好ましくない）や態度を見抜き、それを言葉で説明できるようになる 3. 含意やフレームといった考え方を使って、明示されていない意味や前提されている知識を説明できるようになる 4. 英語の語の意味について、知っているか知らないかで判断するのではなく、どのような見方・前提のもとでそう解釈されるのかを考えられるようになる

講義・演習計画

回	内 容
第1回	オリエンテーション：意味を使用の中で捉える
第2回	評価性①：主観性と意味 - 話し手の態度 - 感情・判断のにじみ
第3回	評価性②：間主観性 - 聞き手を想定した意味 - 社会的共有と評価
第4回	文脈①：状況文脈と意味 - どの情報が補われるか - 明示されない意味
第5回	文脈②：知識文脈と意味 - 共有知識 - 前提となる世界
第6回	語用論との境界①：含意 - 言われていない意味 - 推論としての意味
第7回	語用論との境界②：あいまいさの解釈 - 曖昧性はなぜ許されるか - 誤解と効率
第8回	フレーム意味論①：フレームとは何か - 背景知識としての意味 - 単語は単独で意味を持たない

第9回	フレーム意味論②：意味の焦点化 - 同一場面・異なる注目点 - 視点選択としての語彙
第10回	フレーム意味論③：語彙間の意味分担 - 類義語が完全に重ならない理由 - フレーム内の役割
第11回	意味と使用頻度 - よく使われる意味が「基本」になる - 定着と周辺化
第12回	意味とレジスター - 日常的な語と専門用語 - 同じ語でも異なる意味の重心
第13回	意味とジャンル - ニュース・広告・SNS - ジャンルが意味を方向づける
第14回	意味と文化 - 文化的前提としての意味 - 英語語彙に埋め込まれた価値観
第15回	意味のあいまいさと戦略性 - 曖昧さは欠陥か資源か - コミュニケーション上の機能

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	50%
レポート	
その他	50%

成績評価の方法（コメント）	1. 初回を除く毎回の授業で、その日の授業内容の理解度を確認するために、実際に語の意味を分析してもらう小テストを実施します。 2. 初回を除く毎回の授業で、授業で扱った概念や用語について、その日の授業内容の理解度を確認するための授業課題が与えられます。
---------------	---

参考文献	松本曜 (2003)『認知意味論』大修館書店。 アラン・クルーズ、片岡宏仁（訳）(2012)『言語における意味』東京電機大学出版局。 三木那由他 (2022)『会話を哲学する：コミュニケーションとマニピレーション』光文社。
事前および事後学習の指示	授業内容はすべて録画して、翌日までに WebClass で視聴できるように配信されます。授業で使ったスライドについても、同じように WebClass で配信されます。これらの資料を十分に活用して、授業課題に取り組んでください。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
キーワード	英語 意味 文脈 コミュニケーション
備考(管理者用)	(旧：英語の意味) 08～17L生読替☆ (旧：意味論・語用論) 02～07L生読替

講義コード	17N3270000
講義名称	比較文化研究-インドネシアと日本の音楽文化B　＜秋＞
科目英文名	Study of Comparative Cultures-The Music Cultures of Indonesia and Japan B
開講責任部署	国際教養学部　英語・国際文化学科
代表ナンバリングコード	CULT2460
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 3 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
由比　邦子

授業形態	講義	実務経験のある教員による授業① 楽器博物館で民族楽器の調査・研究に携わった経験を持つ教員が、インドネシアと日本の楽器について解説する。
------	----	--

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 小レポート/小テスト
---------------	--

講義・演習概要	インドネシアと日本は地域も民族も文化も異なるが、東南アジアもしくは東アジアの域内における位置関係、さらにインドもしくは中国という古代の大国の影響を色濃く受けているという点で共通性がある。そして、両国の音楽文化には明らかな類似性、またその反面、似て非なる相違点が見られる。本講義では、音楽と演劇の関わりに焦点を当てて、人形劇を特にキーワードとして両国の古典的上演芸術の諸相を対比させて論じる。
学習（到達）目標	音楽は単に演奏されて鑑賞されるだけではない。音楽が演劇や舞踊と結びついた上演芸術について理解し、上演芸術における音楽の役割を説明できるようにする。

講義・演習計画

回	内容
第1回	音楽と演劇の関わりから見たインドネシアと日本の文化的背景
第2回	上演芸術という考え方
第3回	上演芸術を育む環境
第4回	インドネシアの上演芸術を支える音楽
第5回	日本の上演芸術を支える音楽
第6回	インドネシアの人形劇（ワヤン・クリッ）
第7回	日本の人形劇（人形浄瑠璃）
第8回	ストーリーの語られ方
第9回	操りと語りの関係
第10回	インドネシアの仮面劇と舞踊劇
第11回	日本の仮面劇と舞踊劇
第12回	演者としての人形と人間の関係
第13回	部外者の目がもたらす上演芸術の変容
第14回	インドネシアと日本の“伝統的”上演芸術
第15回	試験およびまとめ

成績評価の方法（コメント）	第 1 5 回に実施する試験 7 0 %、不定期に計 5 回実施するミニテスト 3 0 %
---------------	---

参考文献	皆川厚一編『インドネシア芸能への招待　音楽・舞踊・演劇の世界』（東京堂出版） 福岡まどか『インドネシア上演芸術の世界　伝統芸術からポピュラーカルチャーまで』（大阪大学出版会） 今岡謙太郎『日本古典芸能史』（武蔵野美術大学出版局）
事前および事後学習の指示	前回の授業内容の確認を事前学習とし、授業ノートの整理および授業内容に関連する映像チェック（YouTubeなど）を事後学習とする。
学習時間	事前学習時間：30時間　事後学習時間：30時間
キーワード	上演芸術　人形劇　仮面劇　舞踊劇
備考(管理者用)	（旧：比較文化研究－インドネシアと日本の音楽文化）02～10E・06～10CBCC・02～17L生読替